

人・まち・地球が好きだから「RERA」仲間この指とまれ

# きたく RERA(リラ) Times VOL.12

NPO 法人北区リサイクラー活動機構

HP : [www.kitakurecyclor.or.jp](http://www.kitakurecyclor.or.jp)

私たちは、SDGs 目標達成に向け、限りある地球資源を引き継いでいくため、地球環境の負荷を減らすライフスタイルへの転換をめざし、地域で行動していきます。



HPはこちら

北区リサイクラー活動機構は、6月10日(水)、午後6時～7時に王子の TAGEN(タゲン)にて、第25回通常総会を開催しました。新たな体制で出発したセカンドステージの活動は2年を経過し、会員の皆さまのご支援により、この一年間滞りなく活動してまいりました。3年目に入り、若いメンバーも加わり今回の会議は、いつにも増して活発な意見が交換されました。

## 第25回通常総会が開催されました



若いメンバーの参加が増えて、フレッシュな意見がたくさん出ました。

たしており、本総会は成立しました。続いて白岩志津子理事が議長に選出され、また議事録署名人として阿部一男理事と八上康雄理事の2名が発表されました。なお、提出議案については、若干の質疑応答の後満場一致で全てをご承認いただきました。

総会は、定刻通り午後6時に開始しました。司会は尾関和子理事。正会員数22名中、出席者9名、委任状9名の合計18名となり、定款第25条による開催定足数、正会員総数の2分の1以上の12名を満



忙しい時間をめって山田加奈子北区長が挨拶にみえました。

## 令和7年度は「北区地域づくり応援団事業」が増えました！

令和7年度「北区地域づくり応援団事業」の助成金20万円を受けることが出来ました。

■ 企画1 SDGsシネマ「明日塾」の実施 ※詳細は追ってお知らせします。

映画『もったいないキッチン』の上映 2025年11月24日(月・振休)午後2時

■ 企画2 SDGs講演会(ワークショップ) 2025年12月13日(土)午後2時

「始めてみよう、コンポスト! これならできる都会派おしゃれコンポスト」

講師 コンポストアドバイザー 美喜子氏

■ 企画3 「明日塾」SDGsローカルアクションゼミ

「水素エネルギーと私たちの暮らし」 講師 八上康雄氏

① 2026年1月20日(火) ②2月10日(火) ③3月10日(火) 午後6時

■アドレスは [recycler3196@outlook.jp](mailto:recycler3196@outlook.jp) 皆さまからの提案をいつでもお待ちしております。

今、日本中が「コメ」の話題で沸騰しています。備蓄米（びちくまい）という聞きなれない言葉が、いつの間にか、毎日、誰でもが語るようになりました。

私たちは、そもそもどのくらいの「コメ」が必要だったのでしょうか？この機会に、都市と農業について考えてみませんか？



八上康雄（やがみ やすお）さん

リラ Times (Vol. 9) で色々なエネルギーについてお話しいただいた東京都市大学内燃機関工学研究室の八上康雄さんに、今回は「コメ」について興味深いお話をいただきました。

## 都市で農業ができるか？

私の母方の実家は山梨県の竜王というところですよ。幼い頃から私は、長い時には一か月以上農家の親類にお世話になり、人里の素晴らしさを満喫してきました。大人になった今、残念ながら、北区には農地はありませんが、私は北区内で農業の確立を希望・推進する立場です。

ある時、母とこんな話をしました。

「都市で農業ができるかな？」母は、そんなお遊びみたいなことやめろ、やめろと言うのです。

ところで日本の国は、昔から土地の権力者たちが勢力の大きさを計るのに、コメの石高(こくだか)で示す事は知られています。それほどコメは日本人にとって大事なものであったのですね。それではこのコメを主食として、ひと一人が1日に食べるのにどの位の土地が必要かを調べた事があります。

土地の広さの数え方は、昔は1歩(ぶ)(3.3 m<sup>2</sup>／

畳2畳分)、1畝(せ)(約 10m×10m)、1反(たん)(約 30m×30m)、1町歩(ちょうぶ)(約 100m×100m)という単位でした。古くから日本では、1歩の土地で収穫できるコメで一人1日分食べられると言われてきました。365日とすると365歩=0.12町歩。

一家9人(夫婦2人、子供5人、祖父母2人)、とすると0.12×9=1町歩(ちょうぶ)強の土地が米作だけで必要となります。野菜など作るとしたら更に土地が必要となります。

山梨県は高い山が多く、平地はごく少ないです。河川も流れが急峻で、土地はいつも洪水に見舞われ砂におおわれ痩せていました。古く戦国時代には武田信玄治世の時に、耕作地を安定かつ肥沃なものにするべく土木工事を行っています。川の流れを変えて大きな天然岩にぶつけて勢いを穏やかにする一方、堤防の整備を抜本的に行った(俗称:信玄堤)が今もその機能を維持しています。

また山梨県や広島県の一部地域には、日本住血吸虫病と言って田の作業中に皮膚から直接人体に入り込み、血管を通して主に肝臓に寄生する微生物がいます。当時は、ほぼ誰もが死に至る怖い病気でした。(戦後、抗生物質の投与で解決)。このように専業農家が当時の一般的な家族の食を保つには、広大で肥沃で天災に負けない土地を要するほか、致命的な病気の恐怖がありました。ですから、母たちが都会の農業なんてお遊びだと言う気持ちも分かる気がします。

## 現在は心を癒してくれる農業

現在この農業は、特に都会人にとっては、食を支える事業としての見方以外に、人の心を癒してくれる側面もあることもよく分かっています。今や技術の発達で土地の管理から作物の収穫増加や作業者の安全迄に手が届くようになりました。そんな話を母にすると何となく理解をしてくれているようですし、部屋に

稲穂を飾ると喜んでる母でもあります。



八上 康雄